内村鑑三先生書簡 一

自 明治三十四年 一九〇一

至 明治三十六年 一九〇三

拝啓、御書面正
に拝受、御申越の
件々深く御推察
申上ぐ、キリストを信
ずるものは斯くも辛ら

る事は有之、然し
之に伴ふの栄光も
亦人の知らざる所に
有之り、其栄光と
思ふて其困難を
考ふれは後者は
寧ろ数ふるに足らざ
る事と存候、願くは
君が最終まで君
の信仰を守り得て
君の友人をして君に
就て深く誇る所

あらしめ給ひしを
君の今回の佛書面を
君の名前は君自身に
関する事を取除いて
之を次号の「無教会」
へ掲げたく、惟々天下の
君は同情を表せらるる者
は甚だ多かるべき人も数
加「無教会」一部(添)
呈致しろ、若し佛意
に叶はゞ講読者の
佛仲間入り為し呉れ下
さば、幸の至りに存じ候

左衛門殿 参る

三月十七日夜 内村鑑三

斎藤宗次郎様

〆

三月十二日之

内村鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗次郎様

貴答

拝啓、感想録御送り下され
有難奉存候、君の詩人的觀
察は一同を喜ばし申候、昨夜ハ
又理想團會食日に有之、帰り
自轉車にて君も歩せて同一の道
を走り夜十時帰宅致し候。

三月十一日

拝啓、御贈品有難く拝受
仕り候、貴兄の天上の果実を味はす実
果眼前に現はれて甚だ嬉し
しくなり候、時々再御感想を御
送りくだされば早々

四月八日

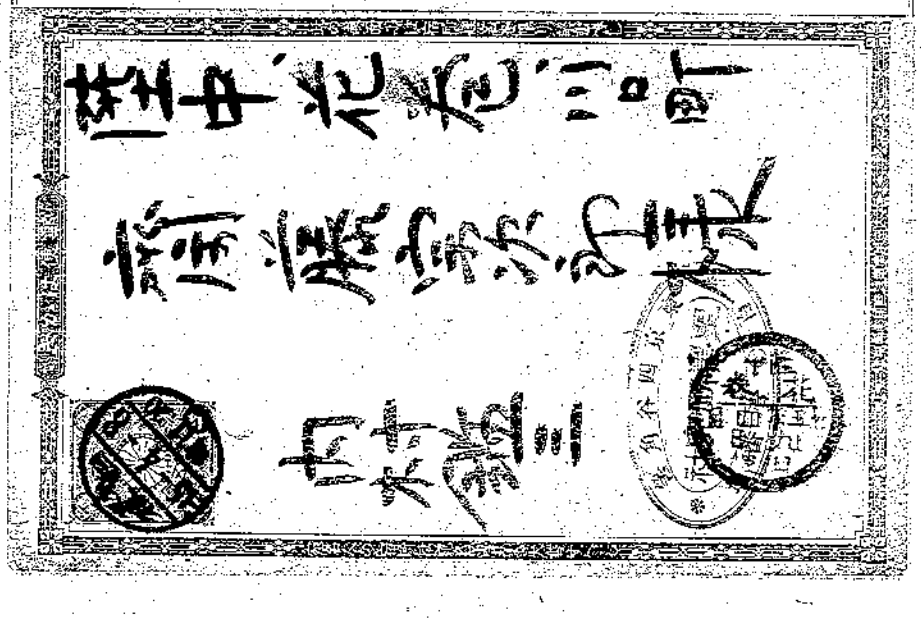
陸中、花巻、川口町

齋藤宗次郎様

内村鑑三

拝啓、御贈品有難く拝受
仕り、貴兄の天与の果実を味はす実
景眼前に現はれて甚だ美はし
しく存候、時々新作感想を御
送り下され度く早々

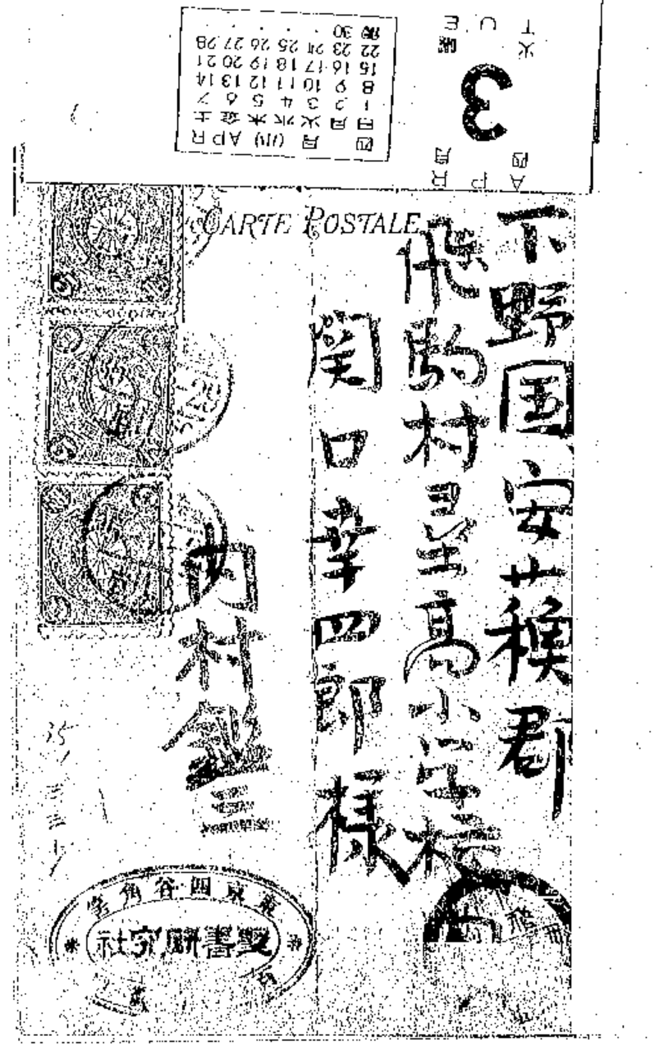
四月八日


陸中花巻川口町
斎藤宗次郎様
内村鑑三

拝啓、貴兄に於ては二コ八著
柏木円澤キリスト傳所
様は清かやすすと清通知
よりたくり、　早々
六月廿九日

関根正雄兄が今般翻訳す
る本の選擇をお先生に
依頼し室をお同封せ
しめ先生の御返事
...「...」を選
...
敬具
昭和十年十一月六日　...生

聖書研究社



CARTE POSTALE

下野国、安蘇郡
飛駒村尋高小学校
関口幸四郎様

内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社

陸中、花巻、川口町
齋藤宗次郎様

内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社

貴書正に拝[illegible]

[illegible]

[illegible]月九日

拝啓、陳は先日下野飛駒関口
幸四郎氏より貴兄へ郵便為替良
き書物を買ひ送り呉れよとて金
壱円送り来り居候甚目下の困難に
付き思附無之に付き満[illegible]
御面会の節まで御預かり置可申[illegible]
御承知下されたく候 早々
七月五日

陸中、花巻、川口町

斎藤宗次郎様

内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社
百〇壹番地

[illegible]年七月廿四日

若し聖旨に叶ひますれば明後二日
午前八時三十九分当地ステーション
を通過します。二等汽車の
中に居ります。天気危険のための
航海は疲れましたが
八月廿一日

拝啓 其後御清康となる陳は
小生義明廿日午前三時四十[redacted]分当地
ステーションを通過致しまするに付き彼
所にて一寸も御面会致したく候、非常の
疲労にても御立寄り御申し下され度
御待ち申し上げ候 早々
九月十九日

陸中、花巻、川口町

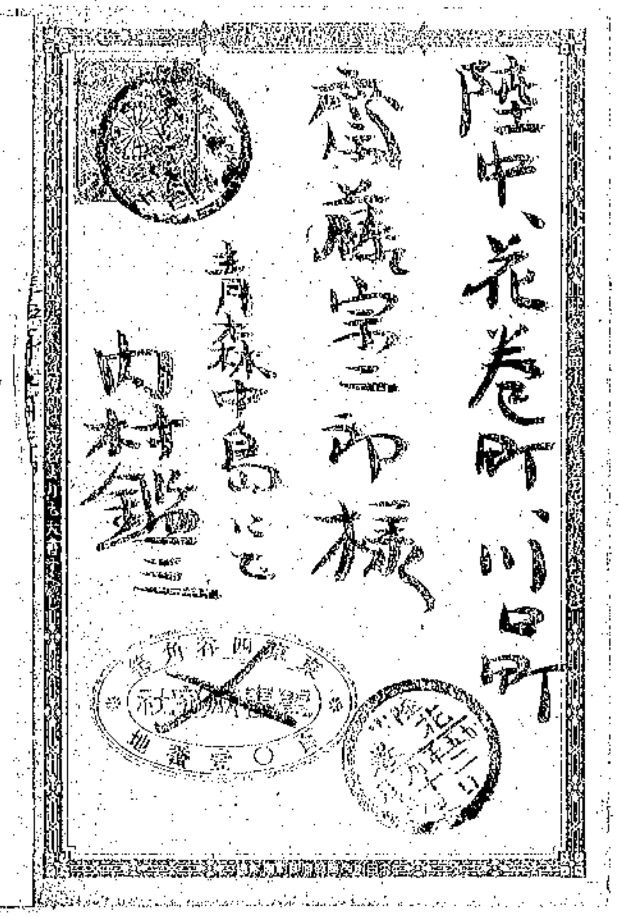
齋藤宗次郎様

内村鑑三

京四谷角筈
聖書研究社
百〇壹番地

拝啓、其後御清康と存候　陳は
小生義明廿日午后三時四十[redacted]分御地
ステーションを通過致しゝに付き彼
所にて一寸も御面会致し度く候、非常の
疲労にて御立寄り申上兼ね候に付き悪
御了承下されたく候　早々

九月十九日


陸中、花巻町、川口町
齋藤宗二郎様
青森中島にて
内村鑑三

拝啓、陳ハ先日清
地通過ノ節ハ皆々
様御出迎ニ与リ、且ツ
何よりの品ニ御投与ニ与リ、
栄誉且ツ慰藉ヲ呈

りに有之、小生義甚だ
仙台に二泊、磐城平に
一泊、仙台にては友人の不
注意にて小生の承諾を
得ずして小生の名を新
聞紙に表出したる事ありて
来聴者東北学院
の講堂に充満し、迷
惑此上なく有之、平にては
多少の妨害もあり、近来
曽て無き不始末にて
甚だ不愉快に有之、總じ
て今回の夏期傳道は

不満足も種はなきを得
ず、神の聖旨に依りしと
云はんよりは寧ろ小生の好
奇心に由りしと云ふべく、
実に慚愧の至りに存候、
御家族様其他御
地同志諸君へ宜しく
も宜しく御伝声願上候
黒沢尻停車場に
小野氏ある者あり、独
主難渋と憂ひて信者
もありし者の由に、御序に
小生に邂逅せんためにワザ
〵青森まで来り、帰途

尻内まで同車せり、清閑

晩の節清談阿兄なければ

右清礼　まで早々

九月廿五日

内村生

齋藤兄

〆

九月廿五日　内村鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗次郎様

拝啓　今朝新社編輯中島様
ノブ子突然入来り小生も彼女の所置
には殆ど人困却致し候、帰す譯にも行か
ず置くわけにも行かず止むを得ず今一晩
だけは拙宅へ一泊致させ候、何分の事に
就ては貴兄より同情を表し下され度、小生は
貴兄が彼女を如何にせらるゝか小生には
差上げ申しか其意を諒解致し居候、只今電報
廿日夕

IMPERIAL JAPANESE TELEGRAPH

電報送達紙

發							著局		受信人居所氏名
報	局	第 號	日	受付 時 分	字	受信 時 分	受信當務者		
外	テツ[illegible]ユ	第 三 號	十一月 一日	受付 [illegible]時 [illegible]分	十 [illegible] 字	受信 [illegible]時 [illegible]分			ハナマキ [illegible] サイトウ ソウジロウ

指定

記事

タカハ[illegible]コ[illegible]ヤキ[illegible]ヤ
デカヘス

發信番號	注意	發信人居所氏名
第 二 [illegible] 號	他人へ宛たる電報の配達を受けたる者は其由を付箋し直ちに之を配達したる電信局所に返戻すへし決して其受取本人へ直送し又は手渡しすへからす	[illegible] 十一月一日 [illegible]

着局日附印

明治三十四年五月印刷局製

大日本帝國電信

陸中、花巻、川口町
齋藤宗次郎様
内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社
[illegible]〇壹番地

拝啓、只今電報を
今朝ほど一書を差上置候、
腓利門書箋に跋可傳
八章三八、三九節等へ
新刊ハ経れ 涙を揮れ
に

ツセ子を帰郷致させ候
左様御承知下さい
尚本人より御聞取を
ねがい上ます

十一月一日

サイトウ君

十一月一日
〆
内村生

ハナマキ
サイトウ君
高橋ツセ子に托す

拝啓、昨夜浩電報に
接し、当方に於ても殊く驚感致し
候、今日まで幾度か逃
走生とかばれ それか為めに
小生に於てしも数年に渉る
心痛甚慮を蒙りしのみ
あらず、逃走者彼自身

は殊とも嘗て斯かる手段
を以て成効せし者あるを
見しこと無之候、勿論
逃走当時に於ては何れ
も推窮すべき事情あ
りし事にて小生も其邉
て是迄今日まで数回か
世話致し候共、其結
果たるや嘗て一回も
満足を呈せしことなく、
依て昨年家内も合議
の上、以来は如何なる場
合に於ても逃走者は世

治致されぬ事に致し、昨春
信州より一人の者来り
小生も情を抑て謝
絶致せし次第に御座候、
人、各々技量あるべく、
然し逃走者の世話は
小生の今日まで幾回か
失敗せし處に御座候。
る、今回の事も之に鑑み、
又逃走者自身の
將来を計り、情を忍ん
で昨年の規定に從ひ、
る右不悪御承知を

下されば、
犬も一度帰郷の上、当人
の保護者より適当の
依頼あり、且つ適当の
時日を供せられ候場合
には出来得る丈けの尽力
は致すべく候、
右申上げたく、早々頓首

十一月一日　鉄三

斎藤兄

十一月一日

内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社

陸中、花巻、川口町

齋藤宗次郎様

親展

拝啓、御書正に拝
読、高橋子未だに落
付かざる由歎はしくなり、
如何にかして實母と和平
成らざるや、是れ小生の畢
に望む所に御座候、若し

萬一再び上京致したしとの事なれば、何れへか地位周旋致すべく候へ共、下女奉公を為すもの覚悟にあらざれば到底衣食の道を得る能はずと存ず、主義の、天然の、人物の、

も條件を附けては下女として置いて呉れる人は無きことと存じ、其邊に於ても甚だ心配に存居候、生方は満員にて如何とも致し難く、然し二三の知人に依頼致し見ても宜し

く、只当地に於て地位の定まるまでは失策無之やう願上候

人に真理を説くには兎角御注意なさるべく候、或者は直に理想其儘を実行せんと欲して身を誤まるもの有之候、真理は利刀の如きものに有之、之を用ゆるの方法を教へざれば却て無益悲惨に終ることも有之候、昌三九才までの今日まで幾度か実験せし處、貴兄に於ても兎角御注意なさるべく候、

右要事まで如斯

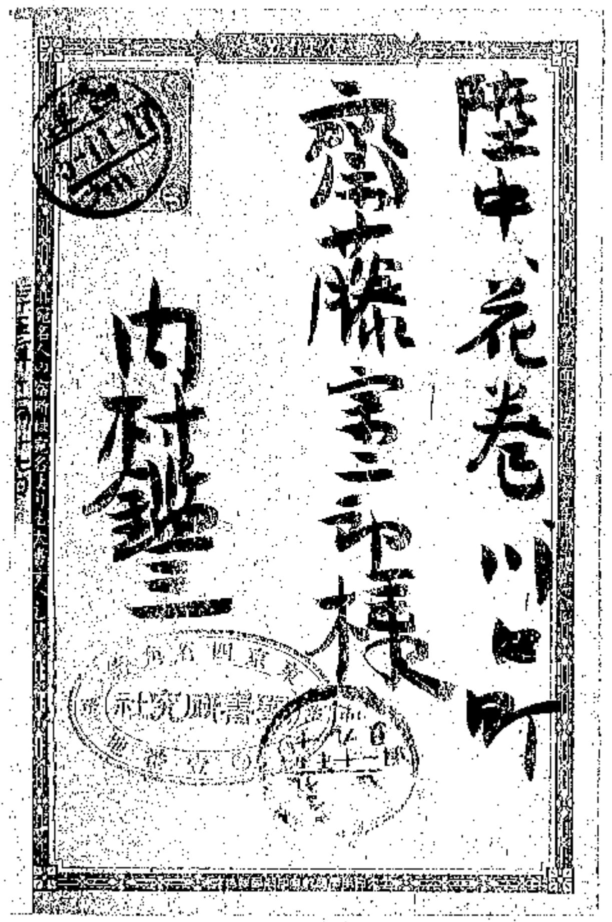
十二月九日
内村鑑三
東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇一番地
聖書研究社

陸中、花巻、川口町
齋藤宗二郎様

貴酬

十二月九日夜
内村生
齋藤君

御書面の趣、とくと見込有之
かゝ付も先方へ問合せの中か、
無し御急もおもやう頼み候
且つ又事業の性質に就て御
異存あもやう重ねて申さば、又
萬一てにまり以候や只実に離し彼方
陽ニ〜しあ返りそうなく候
十一月廿七日


陸中花巻川口町
齋藤宗二郎様
内村鑑三

拝啓、陳は高橋いサ子の事に付も小生親友なる萬朝報英文記者

山縣五十雄氏に依頼致し
が處只今同氏より別紙
の通り申越しかに付て
御通讀の上篤と御勘
考下されたく候。山縣氏は所
謂キリスト信者には無之
が、其非常に深切ある人
に有之、故に若し吾人にして
我意を張ることなく、謙
遜を以て氏と氏の一家に事
へなば天下又となき良
主人と存じ候。小生の只心配する
は、以井子に能く天然と交はる
もが、人物と其暮しとか申さぬ
下婢たるの職務が務まる
否やの一点に御座候。右の点

更ニ愚も御申聞かせ下され
尚ほ急の尚々一應御
返信下されたく偏に願上候
右は要事のみ早々

十二月十九日　内村鑑三

齋藤宗次郎様

拝啓昨日は態々御来車
被下候處何の風情も
無之失礼致し候又其節
は子供へよき御みやげ御
恵与被下難有奉萬謝候
宇野の件更に相談致
し候当分三人の女中か出来
来てもよろしく候はゞ
るべくあまり候付ては給金
等の事迄も先方にまかせることは
出来ずや　其辺御知らせ被下度
候らわしに於ては甚だ以て喜

どぞ彼女をリレーブ致させ候へ
実は三人も女中をおくことは
あまり贅沢に過ぎることと致
一人だけ暇やりたく存じ候が
現在忠実に勤め居る者を
去らせるはその恩に報いざる所にて
然し前にも御話し致したる通り
又は遠からず自ら暇を請
ふべき様子なるにつき一人豫備
としておきたき次第に候へは
左の如き條件にて来て貰ふて
とは出来ぬものにや

一、奉公人とせず、所謂あづかり人としておくこと
一、小遣として金一円宛支給すること
一、食住は無論当方にて支辨すること
一、小さき方の子供（満一年）の世話を頼むこと
一、餘暇には勉学裁縫修行等自由のこと
一、一人の女中暇をとりて去れる後は給金も増加すること
（只今は二円五十銭与へ居り候）

右の條件にて如何にや一応
先方へ御聞合せ下されまじく候
の通りながら此段御願申上候

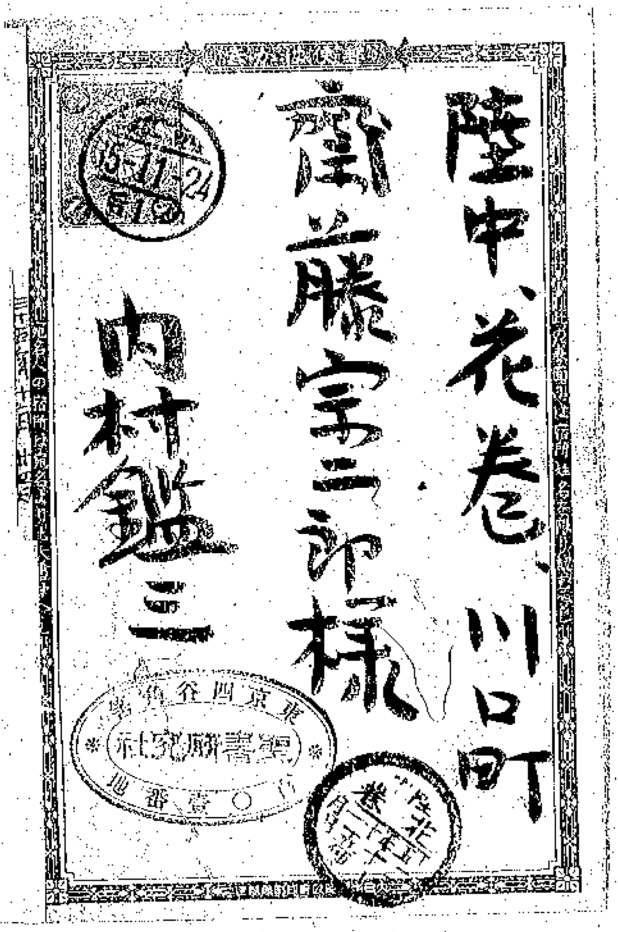
メ

陸中、花巻、川口町
斎藤宗次郎様
至急要事

十一月十九日
内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇一番
聖書研究社

拝啓　昨夜山縣氏ハ面会致シ
最後の承諾を得ば高橋サ子
御差遣はされ相成りて宜しく御
座候、衣類等は此の式多く持参あ
りたし、且つ費用の保證（山縣幸雄
殿）と存考ありたし、一先づは先
右要用御申遣はし申上候　十二月廿四日



陸中、花巻、川口町

齋藤宗二郎様

内村鑑三

東京四谷角筈

聖書研究社

拝啓、別紙の通り
今日の萬朝報の廣告
にあり、如何の譯にや伺
申上げ候、

娘つさ（十八）去る十一月卅日無断家出行衛不
明因て捜るに某紹介上京甚宮敷に入台の由
なれども所在不明本人に言渡し度く出あり所
在御存知の方は郵便先様にて御報を願ふ相
當御禮可申上候
岩手縣陸中花巻川口町
母 高橋き[illegible]外親戚一同

今便を以てつさ子の生存
所在の旨捜索人へ通

知致し置されし山縣氏ハ都
合有、今日尚ほ小生方に
罷在か、
小生は今回の事に[illegible]、失礼
あかくも貴兄に不注意の点
多く有之し事もあり：然
に義侠に与しとは云へ貴
兄に於ては他人の子を貴兄
の理想通り所置せんとせら
れしは貴兄の失錯と存す：
此上ワサ子の事に付き小生
何等の迷惑撥りいたし今
とありては辞退申さずには
斯かる事に就て多くの心配
を為し、天下に対する義
務を缺きしは此事に残

急に候得共
貴兄の山縣氏に呈せら
れし四十子身元引受證書
は文無礼を缺く点有之候
にはそれ生に於て御預かり
申候　早々

十二月四日

内村鑑三

齋藤宗二郎様

十二月四日
内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百〇一番地
聖書研究社

陸中、花巻川口町
齋藤宗次郎様

要事

IMPERIAL JAPANESE TELEGRAPHS

電報送達紙

發局							著局	
私報	テツ[illegible]局	第七七號	十二月十日	午後五時二十五分	十五字		午後五時五十分	配達 ×

受信人居所氏名

[illegible]
サイトウ[illegible]

指定

記事

ツサユヒトテヅカヘス
ウケムラ

著信番號	注意	發信人居所氏名
第 三十 號	他人へ宛たる電報の配達を受けたる者は其由を付箋し直ちに之を配達したる電信局所に返戻すへし決して其受取本人へ直送し又は手渡しすへからす	三十[illegible]年十二月十日[illegible]

著信日附印

大日本帝國電信

明治三十四年五月印刷局製

拝啓 鳥梯の所置に就ては小生も
瑞んだ関係しましたが公義と慈悲とは
[illegible]
[illegible] 事にあると思ひ
ます。此旨殿の得承知願ひます。
[illegible]

拝啓、今日荊妻への御手紙拝
見致しお蔭様で稍や安心致しました
小生も今度ソンナ事も推察致しゐ
為し四十才の我儘も出来ない事にあらずと
分れ共 実も出来得る丈け仲好く
致し居りし申候。只日本家二段の存在
貼数する餘りあり。 日する
九日夜

拝啓、今日荊妻への御手紙拝
見致し小生等も稍や安心致し候、
小生も多分ソンナ事も推察致し居り候
差し当り廿十の賠償は出来し事にはあらずとも
分丈は小生も出来得る丈け致すべく
居られし御中に只日本家三家の存陰
貯勤する餘りなきのみ　早々
九日夜

陸中、花巻、川口町
齋藤宗次郎様
鑑三

陸中、花巻、川口町

斎藤宗二郎様

内村鑑三

拝啓、
高橋ツサ子の所分に就て
は小生は実に迷います。
彼女が通常の女であれば
は私も[illegible]遇のます、然し
も斯く實母親戚より
多くの故障のある者と

山縣氏に依頼するわけにも
行きませんから室の定に
まだ止めて置きます、然し
小生の家として別に必要なきを
者をイツまでも置くことは
出来ません、去りとて今彼
者を家に送り還すことも
出来ず小生も困却
致します
御承知の通り小生は一個の
貧しき傳道師であります
故に神の道を説くことは
出来ますが、人の身を救
頼かりを世話することは出
来ません、且つ夫れ等のために

心思を豊してはならないと
思ひます。貴兄は殊にも此
所生を憐みなさいまし
て、如何にかして一生を此
豊満を取除いて下さるな
らば幸福なる者は一生」
人ばかりではないと思ひます、
小生は常を厭ふのではあり
ません、労して功なきを労と
厭ふのであります。
本家より直接の依頼な
き以上は山縣氏へはどうし
ても依頼は出来ません、
又山縣氏も受けては呉
れません、是非は貴兄が同

自己氏の位置に置いて
考へられば満分々にあろうと
も思ひます
小生貴兄と共に旅費あ
申上ます、然し小生談では
貴兄に迫るより他に道は
ありません、小生は情に負け
て非道走人に一切受けのと
[illegible]つまり貴兄を[illegible]
後悔致します。匆々

十二月七日

内村鑑三

斎藤宗二郎様

山縣氏に宛たる資料の控書類 35ノ二八

迷迷中なれ、

拝啓、

余の卑細なる頭脳は今

両家の紙に込入たる事件を

裁断するに苦しみ、余は迷る

二週日昼となく夜となく

此問題に余の魯鈍なる頭

胸に充てるものなり。而して終に満足
ある結論に達する能はざるなり。
雑誌の原稿まさに迫り來る、
「處世の懸」の櫻宮は多くの時
間を要すべく、殊に年末に迫
りて余の如きも多忙ならざるを
得ず。余は彼等に對して不情
ならんことを懼る。又貴下に對
して友情を全うせざらんことを恐る。然
れども世事は煩はしくも余は今如何
ともする能はず。只一ヶ月余に渉
る余の苦悶を以て貴下等の
宥恕を乞はざるを得ざるなり。
余は余の有する丈けの智慧を
搾りて按ずるなり。又別紙は實に
要するに問題を選[illegible]せんとしてせざ
りし者、余の苦悶の一端を示す
べければ謹んで呈上す、

余は彼女の為に何事をも為し得ざるを悲む、但し若し余の祈禱にして何か効力あらば余は之を継続すべし　匆々

十二月十日　内村鑑三

斎藤宗二郎様

十二月十日

内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百○壱番地
聖書研究社

花巻
斎藤宗二郎様
高橋ヲサム持参

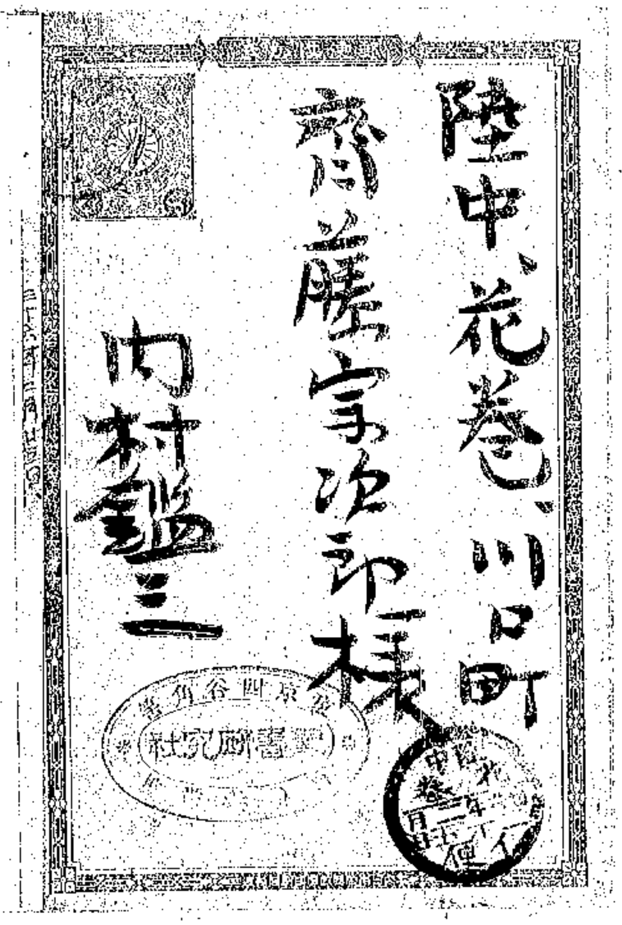
拝啓、ワサ子に對し深き愛ある只
情義しか着しあ出せを得ず
人は財産權を放棄しも自由
の身となりても清廉知無に
当方一同なりて彼女の為に祈り
居り加日する
十二月十三日夜

35/50

拝啓、清病人様一日も早く清
快方に向はれんことを祈りに
高橋家に預けられたる神の摂理権
くより外無之候小生は今ときあつてツ
サ子を逐帰せしを神の指導と存じ
無上喜ばしき時は如何にワサ子かりしよ　早々
二十三日夜

拝啓、清病人様一日も早く清
快方に向はれん事をと祈り候
高橋家に顕はれたる神の摂理驚
くより外無之候、小生は今となりてル
ツ子を遂に帰せしを神の指導と存候、
世上其当時如何にツラかりしよ、早々
二十三日夜

陸中花巻川口町
齋藤宗次郎様
内村鑑三


陸中花巻川口町
齋藤宗次郎様
内村鑑三
東京四谷角筈
聖書研究社

拝啓、甚だ近頃御幸福の由大慶
の至りに存じ候、サテ先般御申越の事実
も勘考致し候処、勿論小生の書きし者
を御使用下さるには何の差支も無之候共
然し萬一之を貴兄に御承諾申上候はゞ
他の友人に對して之を拒む譯に参るまじく、
それがためには研究社の規律を乱すの虞
れ有之候につき、相成るべくは当方にて生

極せしものを其後伝便よりやう備に
額少く、且つ其方が入費も嵩み不申
返て伝便利と存じ候、パムフレットの義も追
々とアトを出版致すべくば、伝道用の
冊子はお成丈廉価にて差上ぐるやう取計
り可申候。右御返辞まで早々

三月十五日

斎藤宗二郎様

内村鑑三

陸中、花巻、川口町

斎藤宗二郎様

〆

内村鑑三

三月十五日

東京四谷角筈百〇番地 聖書研究社

拝啓、益々清寧
慶賀奉り
扨御問合せの件に付き
好き御返辞を差上る
能はざるは小生の甚だ残

急に発する処に御座候か
御推察の通り難渋
二回もありてより一泊以上
の外出は非常の困難に
有之、且つ今月は既に
数回の演説の予約有
之、其外外出致難候、
来月は家内病気療
養のため箱根へ同道
致さねば相成り不申、実
に残念千萬には存じ候共
此所当分の間東北旅行
の希望無之候間右不悪
御承知下されたく候

然しながら精神は口を以て
するよりは筆を以てする方
好く傳はるものに御座候、
小生を演説に招く者は實
は小生より多くを學び得ざ
る者に御座候、此邊篤と
御解り、普通の俗人
は偏に、其人の面を見て
其人の精神を知らんと欲
するの愚を御学びあきせう
偏に頑者、
理想團支部の如き形
式を要するは甚しかるか
しと思ふ之を續くるは非常
に難し、既に今日まで延て
直に消えしもの澤山有之候、

信州の如き、一年位の今日
僅かに研究し居る者の数
名を録するのみにて法学者の
已に能く法家知者、
未だ其の法律意見を知らざる人
有ることと存じ候、
高橋博士より書面
有之、御配慮に預り候
由、大慶の至りに存じ候、貴
兄よりも其等の善意を彼
等に御傳へ下されたく候

四月五日　内村鑑三

齋藤兄

2.
三十六年
四月五日

〆

明治三十六年
四月五日

東京府…
字角筈…
聖書研究社
内村鑑三

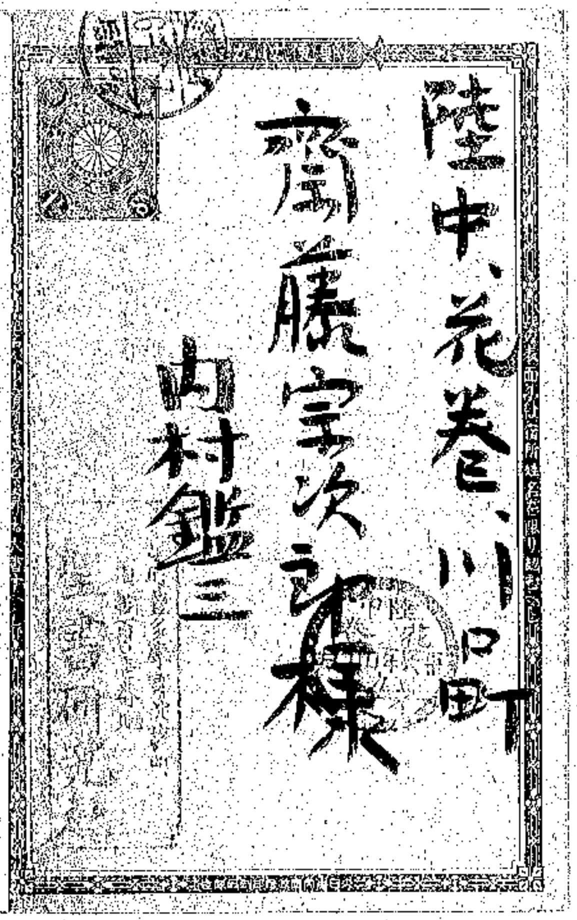
陸中、花巻、川口町
齊藤宗二郎様

貴酬

拝啓、迫害を賀す、奮て花巻の孤城を守られよ、君は多くの点に於て余よりも幸福なる人間なり、願くは特別に余のために祈られよ、至高の青年会を守るにあらざれば余と余の事業も滅びん、諸君に宜しく、

四月七日夜

早々


陸中、花巻、川口町
齋藤宗次郎様
内村鑑三

拝啓、御書面に拝読、御寄
贈の御論文は甚だ結構に御座候、
早速来月の講演会号に掲載仕る
べく候、今月第四木曜日の発行は
小生休養々のため休刊仕るべく候、混

陰金等へ出来只は勿論、照井居
ソサ子其他の諸氏の有終の表白を
寄贈せられたく存す。是れ同志を
天下に得るの最良方法と存す。
満地満足者を是非一度満見
舞申したく存の。此秋にでも相為

かくば此目的を達し得んと存る
何くろ六年間引つ続きの労
働にて室も昨今は大分マイリ居
り候、
希望もあり、失望もあり候。然し神は
我等と偕に戦ひ居給ふ故安心致し候。

関口幸四郎氏札幌ニて病気の由、実ニ
困り入り申候、氏の行為は大ニ常識を
欠きし事と存候、常識なき信仰は害
も注意すべき事と存候、今の時ニ当りて
独立信者ニ居有にあるのは大なる罪にあ
り候
右御返事旁々早々
斎藤兄 六月十二日 内村鑑三

〆

六月十二日 内村鑑三

陸中、花巻、川口町

斎藤宗次郎様

浩無事帰宅を
賀す、
今回君の頭上に落ち来り
し世の所謂不幸に就て
は余は深き同情を君
に寄す、余は確かに信

ず、神は此世に於ける君の希望を塞いで彼世に於ける君の希望を開き給ふを、願ふ恩恵豊かに此時に方て君の上に斯る、君をして能く此詩[illegible]の主の愛を知る喜び深きに至らんことを、

希伯来書十二章一より十三節まで

六月廿四日 内村鑑三

齋藤君

〆

六月廿四日
内村鑑三

陸中、花巻川口町
齋藤宗次郎様

貴酬

東京四谷角筈
聖書研究社
百〇壹番地

拝啓、諸君清
寧拝賀奉り候。
今年の感想録中
花巻より来りし者

は最上位を占め、神の
恩恵と深く感謝
仕り候。小生も是非都
合致し今年秋までに
は一度満地と満見
舞申上たく存候、

一寸と満号収申上たく
さは貴兄には小生が萬
朝報へ寄贈せし
短文満切取置きに

相成り居り候や伺申上
候 実は右取まとめ一小
冊子ともいたしたく存候共
小生儀抔の為には欠
陥多く困入り候はゞ是
し貴兄に於て御保存あ
りたく候 [illegible] 候は願上
候 先般の上は勿論数冊
呈上仕るべく候
家内箱根へ入湯致し
居り候所昨夜帰京致し候
小生は今明土浦へ
参り候 世の人の会合は

随分暑か[illegible]折小生
い日十七

七月十二日　内村鑑三

斎藤宗次郎兄

東京府下淀橋町柏木
聖書研究社

七月十二日

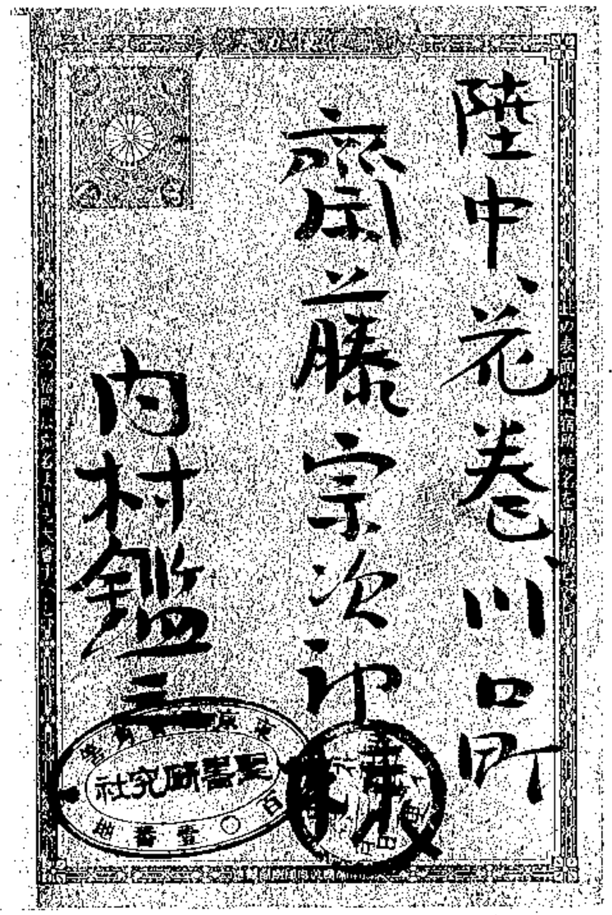
内村鑑三

陸中、花巻、川口町

斎藤宗次郎様

親展

拝啓、切抜御送り下され
有難奉存候、成るべく大け
傷を附けずして御返送致し
たく存候、右は御礼まで早々
且又御菓子有難存候
七月十四日



陸中花巻川口町
齋藤宗次郎様
内村鑑三
聖書研究社

拝啓、陳は別紙の通り只今札幌宮川氏より申来りしに付き清廻し申上ぐ、或は斯く云ふ人あるを小生も疑を抱き居りしが、今に至て少しく安心致しかやう感ぜられ候、今の世に在て独立主義を持続し得る者は神の特別の恩恵に

由る者にてあらざれは能はずとなるが、貴兄
に於ても此後は其辺に注意せられ、且つ
単々申上げ置ける経済上の独立を失はれ
ざるやう其辺に深注意せらるべく候、
縦令二三の背棄者あるも我等迄て
も落膽をすることなく、我等は此上
益々進んで此主義のために働きたく

存候、来る九月か十月には小生清地
方へ援兵に罷出づべく候間今より清
準備致し置かれたく存候、尚ほ此上
清地の独立主義者に注意せられ、
関口氏の例に鑑み、一時の熱心の餘
り途中にて挫折する事のなきよう
篤と御勘考下されたく候、

先日は学生達参上致せし由、御
厄介の事とて存候、小生より厚く御
礼申上候、匆々

七月廿五日

鑑三

南原兄

関は本年四月より日曜の臨時牧師に頼
んで明治学院神学部の学外生に
入るゝ事と為りし由にて 九月頃に
出京せらるゝ筈の由に候
之れまで田舎ばかりに居つて何にも知ら

なかつたものか　札幌に来て　日基教
会●あたりの人々と交際する様に
なつて（夫れは斉藤兄が関口や他日基
の信者なる木村と云ふ人に紹介したる
結果より出でたるにてか）いろ〱の悪
智慧が吹き込まれて急に夢が
醒めて（？）独立気もいやにな
つたのだらうと察せられ候
関口もか無教会へ来る途中板挟と

して十五日退院　入院中二回に四
十四教人五十五弗　斉藤兄より
補助致され居り候

先づは時候御伺ひ旁々申上候

七月廿二日

巳八

内村先生

封

七月廿五日

内村鑑三

東京府…
字角筈百…
聖書之研究社

陸中、花巻、川口町

斎藤宗次郎様

3.
三十六年
七月廿五日

拝啓、暑中御無事でおすごしと存じ、
別紙の如きものが飛出ケました、
其ダレの書ある手は一目瞭然で
あります、信ずるに易くして捨つるに速
ある間に幸四郎君たる男と気の

毒あるだと思ひます、澤山独之信者の厄介に成りし末、此始末とは人間の心程怖るべき者は外にありません

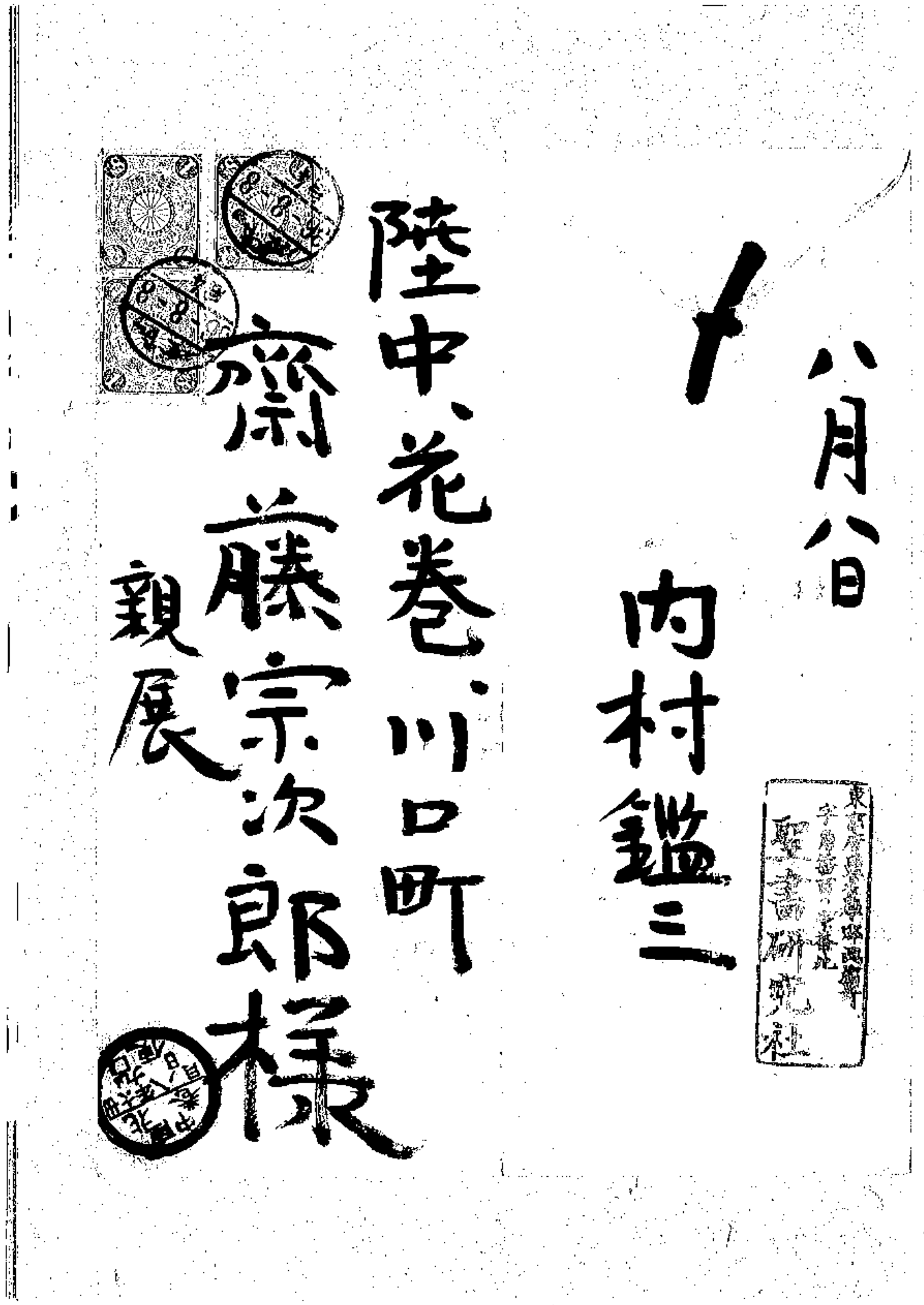
君の肉體の健康に注意せられよ

八月八日　　鑑三

齋藤兄

来る廿七日まで相州鎌倉、乱橋、藤田方に滞在

[illegible]


陸中、花巻、川口町
齋藤宗次郎様
親展
八月八日
内村鑑三
東京府豊多摩郡淀橋町
字角筈百一番地
聖書研究社

札幌

拝啓、秋冷稍催ふ節
御地諸君御一同御変
りなきことと存じ、先般
三名の同志御地を訪問
賜い、亦度々の御手紙にて
御様子を承玉はり、小生は

清地に於て独立主義の
基督教の根を固めつゝ
あるを知て非常に有難く
感じ申候。尚は此上は清
恩寵の益々加はらん事
を祈り上候。
小生義一度清地へ罷出たく
存候へ共三日留守を致せ
ば前後共六日丈け用事滞り
困却を極め候。それがために
目ッ駄に外出は出来兼ねるが
且つ小生が殊に清地へ出るとすれ
ば例の宣教師連が種
々の誤想を起し、ツマラナキ
誤解を招き可申其邊も

注意致し居候。依て他に佛地
の方面へ向ふ祈りが第一は必
ず佛之実申すべくに工夫ワ
ザくは佛遠慮申上候
左様佛分れ居らずたくに小生は
分子を作り、教会を作るとの
疑寒を受くのを最も嫌ひ
申候。それ故星座にて開催
聖書研究会も前日曜日
限り解散致し候。然し此事に
関し貴兄に於ても小生に傚はるゝ
の必要は毫も無之候。
スクラップブック永々拝借致
し有難奉存候。今日小包を
以て御返送致し候。序ら佛蘭
手に入らなくば内にパムフレット

三千円封入致しおき候御使用
下されたく候
御地同志諸君へ宜しく御
傳声下されたく匆々

九月十六日

内村鑑三

宮部兄

〆

九月十七日

内村鑑三

陸中、花巻、川口町

齋藤宗二郎様

聖書研究社

拝啓、諸君益々清
寧、拝賀奉り、
陳は小生義今年中に是
非一度清地へ出張致し
特と信仰上の清話致し
たく存居り、處、今日まで

時を得ず残念に存居候
處、今月は雑誌を終り
候はゞ二三日別に要事
無之候に付き、若し諸君
に於て御差支無之候はゞ
参上仕りても宜しく候に付
き、茲に御都合伺ひ申上
候、大体雑誌校正は十六、
七日頃に終り申すべく候に付
き其翌日直に出発仕る
べく候、滞在は四五日間よ
り多くは出来不申候。
且又御参考までに申上
置候、そは地方出張の定
規に従ひ御地諸君に於て

小生中等汽車賃丈け研究
社へ御寄附願上候、尤も
其餘りに多きに達する時は
当社に於ても一部分負擔
する主趣には候、
今日書面を以て御伺候
せし件は頗る重大なる事
件に御座なく候御面会の
上、篤と小生意見申上ぐ
るまでは確と御控へ願
上候、
右至急御一報迄かく
頓首　匆々

十二月八日

内村鑑三

斎藤宗二郎様
外花巻諸兄姉

十二月八日
内村鑑三

東京四谷角筈
聖書研究社
百〇壹番地

陸中、花巻川口町
齋藤宗二郎様
要件

拝啓、小生義差し他ニ差障
生せずハば来る十六日（金曜）午前
十一時赤羽発汽車ニ乗込可申
候に付き其夜十二時半帰地に
着可仕候間差し今日後手紙

又は電報差上ずば其時刻にステーションまで一寸御出迎い願上候、
十九日(土曜)午前は休息仕りたく、午後より夕にかけ信者の会合仕るべく候。
二十日(日曜)午前は聖書講議可仕候に付き其時には信者諸君の外に諸君の御紹介に成る未聴者を許し可申候、
同日午後質問会を開き申すべく候、
同夜(或翌朝早く)帰途に就き申すべく候、
所謂公開演説ある者は開き申すまじく候。

左の諸氏へ一寸至急御通知願上候

江刺郡田原村大田代　菊地玉三郎氏

東磐井郡薄衣村　加藤九十次郎

上閉伊郡遠野町　川村賢五郎

岩手郡松尾村　岩上浅五郎

世の中へは小生の御地行は秘密に願上候　匆々

十二月十二日　内村鑑三

斎藤宗次郎君

十二月十二日

内村鑑三

〆

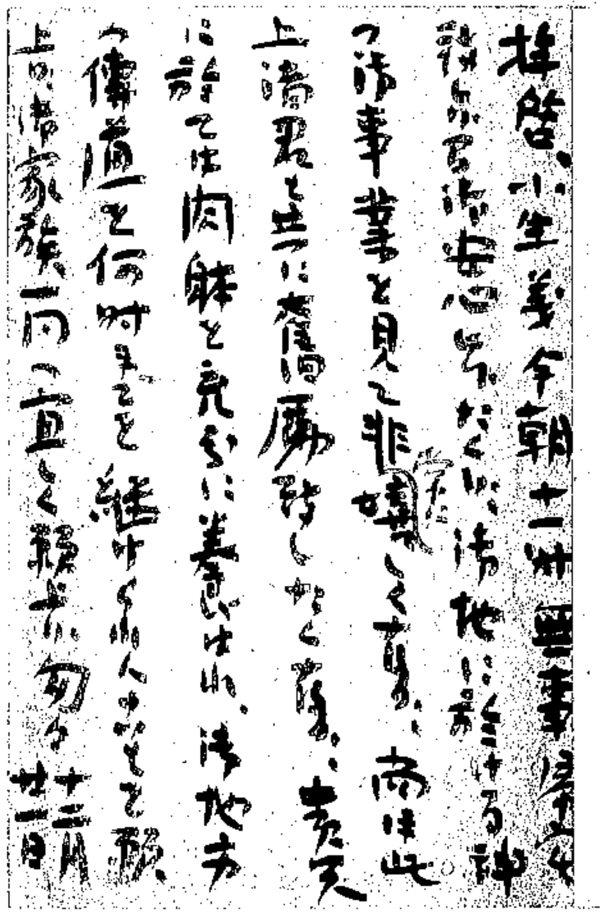
陸中、花巻川口町

斎藤宗次郎様

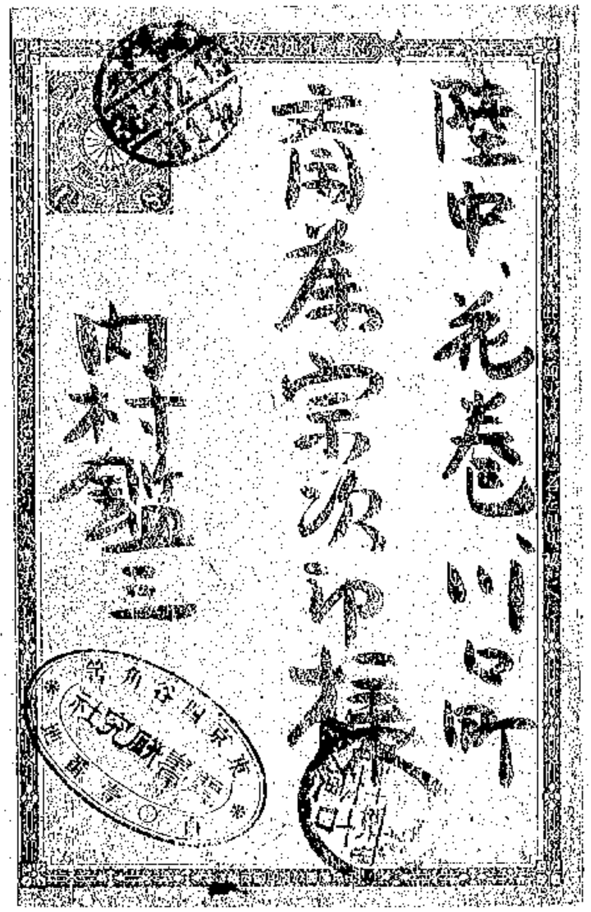
要件

拝啓、金子入書校正
に落手仕り候
校正今朝終り候。前居清
約束通り十八日午前十一時
（羽田）発に無理の得べきと
敬具 匆々 十二月十五日

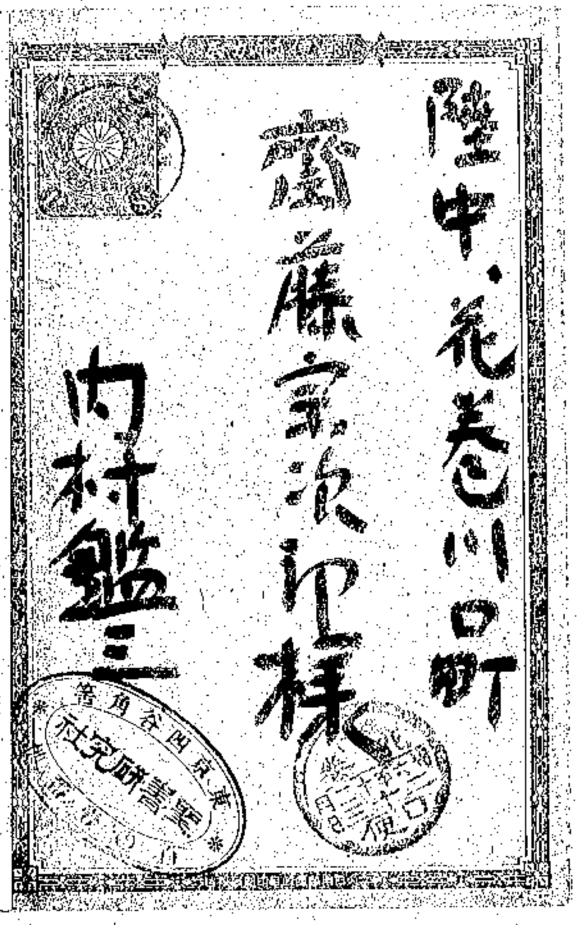
拝啓、小生等今朝十二時無事帰着
致し候間御安心下されたく候。清地に於ける神
の御事業を見て悲壮しく存じ候、尚此
上清君と共に御励み致し度く候、貴兄
に於ては肉体を永らに養ひ給ひ、清地方
の伝道を何時までも継けられんことを願
上げ候。家族一同へ宜しく願上候。匆々 十二月廿一日



拝啓、小生等今朝十一時無事帰宅候
間御安心被下度候、花巻に於ける神
の御事業を見て非常に嬉しく有之候、尚ほ此
上諸君と共に奮励致し度く候、老兄
に於ては肉体を充分に養はれ、花巻地方
の伝道を何時までも継けられんことを願
上候、御家族一同へ宜しく願上候、匆々　十二月廿一日



陸中、花巻、川口町
斎藤宗次郎様
内村鑑三


陸中、花巻川口町
斎藤宗次郎様
内村鑑三
東京西角筈
聖書研究社

十二月廿日の花巻

内村生

外(そと)には雪は二尺餘り
寒気(かんき)は膚(はだえ)を劈(つんざ)く計(ばか)り
北上の水は浩々(おうく)と流れ
岩手の峯は隠々(いんく)と聳ゆ

内には同志(とも)は四十餘り
歓喜は胸(むね)に溢(あふ)るゝ許り
讃美の歌は洋々(やうやう)と揚(あが)り
感激の声は咽々(えつえつ)と聞(きこ)ゆ
嗚呼美(うる)はしき此會合(あつまり)
聖靈(みたま)は奥羽(あうう)の野に降れり
我儕(われら)は深雪(みゆき)の中に在りて
栄光(さかえ)の天国(みくに)に居(を)る手と思へりし

花巻滞君
浩中

右は今日東京市中喧
騷の中を歩みながら思い
出しましたから寫して差上
ます。

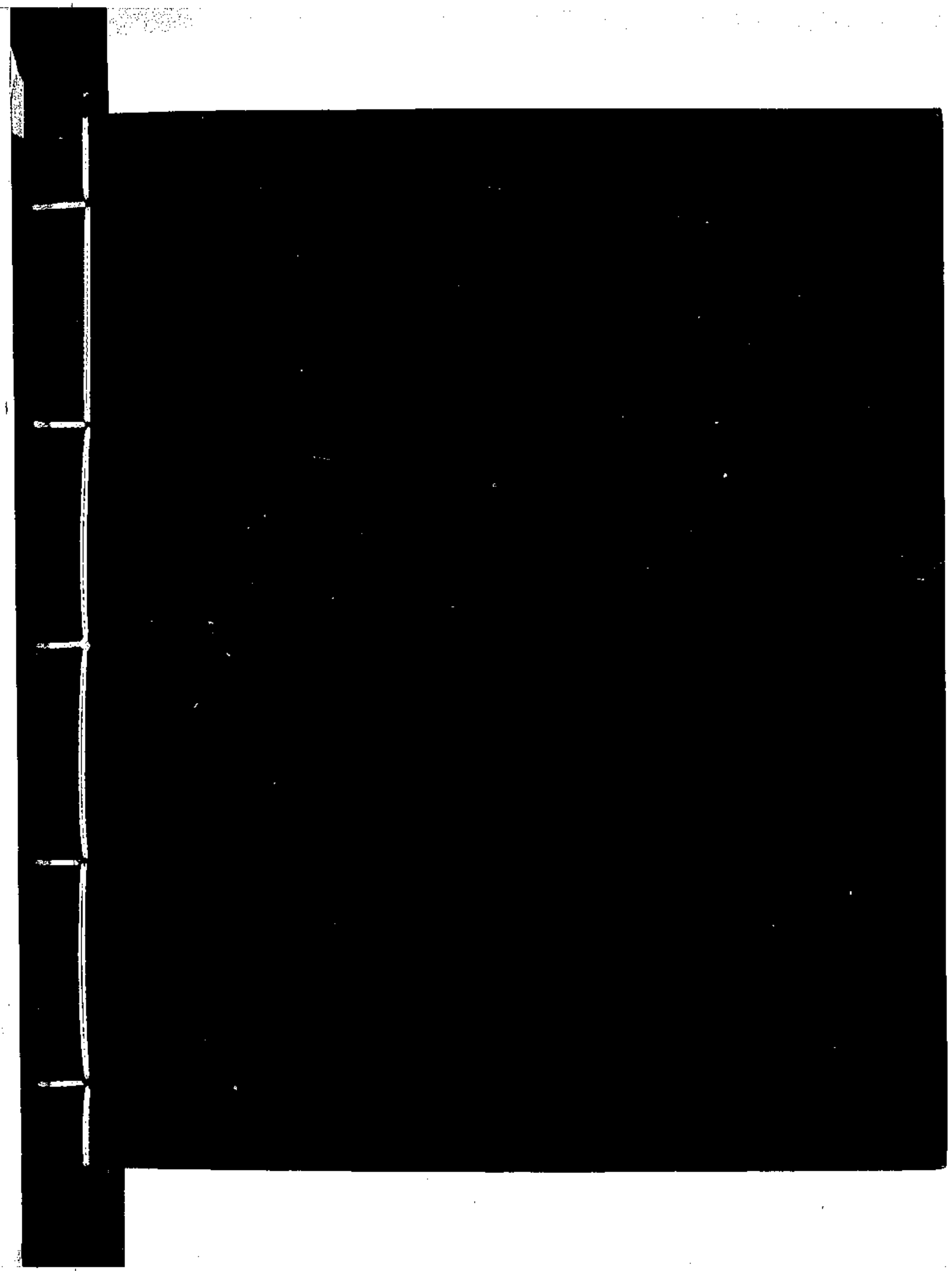
十二月廿三日夜

〆

十二月廿三日

内村鑑三

陸中、花巻川口町

齋藤宗次郎様

嘉信